九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

1945年以前のドイツにおける「ブッククラブ」と伝統的な書籍販売

竹岡, 健一
鹿児島大学法文学部 : 教授

https://doi.org/10.15017/1517809

出版情報：九州ドイツ文学. 28, pp.31-59, 2014-10-07. 九州大学独文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

1945年以前のドイツにおける「ブッククラブ」と伝統的な書籍販売

竹　岡　健　一

はじめに

小論ではドイツの「ブッククラブ」を取り上げるが、一般には馴染みのない研究対象と思われるため、初めに、ごく簡単な解説を加えておきたい。まず、小論では、「ブッククラブ」という言葉を、ドイツ語の Buchgemeinschaft の訳語として用いている。このドイツ語が「ブッククラブ」を指す言葉として使われたのは、1924年に設立された Deutsche Buch-Gemeinschaft が最初であり、その際には独自の企業名として用いられたが、その後、同種の企業を表す一般的な名称として使われるようになった。直訳すれば、「書籍共同体」や「図書共同体」などとなるであろうが、「ブッククラブ」という英語表現を充てているのは、主に英語圏において同種の団体に用いられている名称との整合性を考慮したためである。また逆に、Deutsche Buch-Gemeinschaft に「ドイツ・ブッククラブ」という訳語を充てず、「ドイツ図書共同体」としているのは、文字通り「ドイツ・ブッククラブ」(Der Deutsche Buch-Club) という名前を持つブッククラブとの区別を図るためである。なお、近年、「ブッククラブ」という言葉は、リーディング・リテラシーを育成するための学習法の名称として用いられることも少なくないが、小論で扱う「ブッククラブ」は、「書籍販売」の一形態を指している。

では、ブッククラブとはいったいどのような書籍販売方式なのか。その本質的な特徴については後に詳しく検討するが、ごく大まかな特徴づけをするとすれば、(1) 本がもっぱら会員を対象に販売される、(2) 本が小売店を介さず直接販売される、(3) 本が店頭価格よりも安く販売されるという三つの点があげられる。[1] なお、ブッククラブで提供される本の多くは、いわゆる「ライセンス版」である。つまり、ブッククラブは、既存の出版社で刊行された本の版権を譲り受け、オリジナル版とは異なる装丁の版を、会員向けに生産・販売するのである。このようなブッククラブのうち、1945年までに設立されたものについて、筆者は、これまでにおよそ20の企業を取り上げ、特定の思想の普及を追及する「思想的ブッククラブ」と企業としての利益を追求する「営利的ブッククラブ」の二種類に分けて概観するとともに、保守的商業職員団体である「ドイツ民族商業補助者連合」によって1916年に設立された「ドイツ家庭文庫」について、その発展と思想傾向、主な作家・作品、会員雑誌の変遷、装丁の特殊性などに関する詳細な事例研究を行った。ところが、その後の調査によって、1945年以前のドイツに50以上のブッククラブが存在し、その分類や考察の観点も多様であることが分かった。そこで、小論では、新たに得られた知見に基

づいて、伝統的な書籍販売との対立点を中心に、1945年以前のブッククラブの特質を浮き彫りにしたい。

ワイマール共和国時代の隆昌

それでは、1945年以前のドイツには、いったい幾つのブッククラブがあったのか。それを示したのが「表１」であり、そこには巻末に記載した文献から把握し得た総数52のブッククラブ（先駆的団体も含む）の名称と設立年が示されている。[2)] このうち、左端に付した通し番号で９以下の44のブッククラブがワイマール共和国時代（1919～1933年）に設立されていることから、この時期がいわばドイツにおけるブッククラブの最初の隆昌期であったと言える。

では、いったいなぜ、ワイマール共和国時代にこれほど多くのブッククラブが設立されたのか。その理由は、主に当時の時代状況と伝統的な書籍販売のあり方との乖離に求められる。従来、もっぱら小売店を通じて、教養市民層に、固定した価格で本を販売してきたドイツの書籍販売は、第一次世界大戦後、新たな状況の前に立たされた。つまり、社会のイデオロギー的、政治的、宗教的な細分化に伴って、「これまでにない多様な出版物」が、また戦後のインフレの中で、「より安い本」が求められたのである。平均的に見て、1920年代の本の価格は、第一次世界大戦前と比べて高く、国民の購買力と不釣合いな状況にあった。ヴィルヘルムⅡ世時代の文化的エリートも戦争とインフレによって貧困化し、生活を切り詰めざるを得ない中で、国民の大部分にとって、本を買って手に入れることは困難だった。しかし他方で、19世紀以来の国民教育や労働者教育の結果として、これまで本を読んだり所有したりしなかったサラリーマンや労働者の間でも、本への関心が高まっていた。にもかかわらず、自らの伝統を強く意識する書籍販売には、こうした状況に対応することがほとんどできなかった。そこで、対案としてブッククラブが登場し、伝統的な書籍販売の枠外で、「安い本」を、と同時に「多様な本」を提供したのである。

こうした意味で、1920年代におけるブッククラブの隆昌は、それが伝統的な書籍販売に対する「経済的・内容的対案」をなしたことに主な原因があったと言える。だが、一体どのようにしてそれが可能となったのだろうか。そのことを明らかにするため、次に伝統的な書籍販売とブッククラブの違いをより詳しく見ていきたい。

経済的特質

まず経済的な側面から見ると、ブッククラブが伝統的な書籍販売と最も異なる点は、経営上のリスクの回避が可能となる点にある。ブッククラブの場合、会員は入会とともに一定の本の購入義務を引き受けるが、それによって、印刷・販売する本の数を予めかなり正確に計算することが可能となり、一般の出版社と比べて大幅に無駄を省き、価格を低く抑えることができるのである。購入義務には、予め決められた特定の本を購入する形式と、

表１：1945年以前のドイツのブッククラブ

	団　体　名	設立年
1	カトリック良書普及協会（Verein zur Verbreitung guter katholischer Bücher）	1829
2	シュトゥットガルト文芸協会（Der Literarische Verein in Stuttgart）	1839
3	ドイツ文学のための一般協会（Allgemeiner Verein für deutsche Literatur）	1872
4	娯楽と知識の文庫（Bibliothek der Unterhaltung und des Wissens）	1876
5	愛書家協会（Verein der Bücherfreunde）	1891
6	自然愛好家協会コスモス（Kosmos, Gesellschaft der Naturfreunde）	1904
7	読書向上文庫（Emporlese-Bibliothek）	1908
8	ドイツ家庭文庫（Deutsche Hausbücherei ）	1916
9	愛書家国民連合（Volksverband der Bücherfreunde）	1919
10	ドイツ巨匠同盟（Der Deutsche Meister Bund）	1920
11	ドイツ文学愛好家協会（Gesellschaft Deutscher Literaturfreunde）	1922以前
12	愛書家同盟（Der Bund der Bücherfreunde）	1923以前
13	ドイツ文化共同体（Deutsche Kulturgemeinschaft）	1923以前
14	ドイツ国民文庫（Deutsche Volksbücherei）	1923
15	図書同盟（Bücher-Bund）	1924
16	グーテンベルク図書協会（Büchergilde Gutenberg）	1924
17	ブックサークル（Der Bücherkreis）	1924
18	ドイツ図書コレクション（Der Deutsche Bücherschatz）	1924
19	ドイツ図書共同体（Deutsche Buch-Gemeinschaft）	1924
20	プロテスタント図書同好会（Evangelische Buchgemeinde）	1924
21	ヴォルフラム同盟家庭文庫（Heimbücherei des Wolframbundes）	1924
22	ウラニア出版協会・ウラニア自由教育研究所 （Urania-Verlags-Gesellschaft・Urania Freie Bildungsinstitut）	1924
23	ボン図書同好会（Bonner Buchgemeinde）	1925
24	図書同好会（Die Buchgemeinde）	1925以前
25	ドイツ図書購買共同体（Deutsche Buch-Einkaufs-Gemeinschaft）	1925
26	ドイツ図書協会＜ノイラント＞（Deutsche Buchvereinigung „Neuland“）	1925以前
27	カトリック図書同好会（Katholische Buchgemeinde）	1925
28	祖国文化会の＜文化会文庫＞ („Kulturdienstbücherei“ des Vaterländischen Kulturdienstes)	1925
29	ロマン主義同好会（Romantische Gemeinde）	1925
30	聖ヨセフ図書協会（Sankt Josephs-Bücherbruderschaft）	1925以前
31	南ドイツ図書共同体（Süddeutsche Buchgemeinschaft）	1925
32	キリスト教図書愛好家同盟（Bund der Freunde christlicher Bücher）	1926
33	愛好家サークル（Der Freunde Kreis）	1926以前
34	ハイネ同盟（Heine-Bund）	1926
35	万人のためのウニヴェルズム文庫（Universum-Bücherei für Alle）	1926
36	国民図書同好会（Volks-Buch-Gemeinde）	1926

37	民族ドイツ図書同好会（Volksdeutsche Buchgemeinde）	1926
38	ドイツ・ブッククラブ（Der Deutsche Buch-Club）	1927
39	家庭図書同好会（Heimbuch-Gemeinde）	1927
40	マルクス主義図書協会（Marxistische Büchergemeinde）	1927
41	フォス書店＜牧神文庫＞（„Pan-Bücherei“ der Vossischen Buchhandlung）	1927以前
42	国民劇場・出版販売協会（Volksbühnen-Verlags- und Vertriebsgesellschaft）	1927以前
43	アーダルベルト・シュティフター協会図書共同体（Buchgemeinschaft der Adalbert-Stifter-Gesellschaft）	1928以前
44	自由愛書家協会（Gilde freiheitlicher Bücherfreunde）	1928
45	大胆な投擲（Der Kühne Wurf）	1928
46	国民図書協会（Volksbuchgesellschaft）	1928
47	シオニズム図書同盟（Zionistischer Bücherbund）	1929
48	プロテスタント家庭文庫（Evangelische Heimbücherei）	1931
49	プロテスタント愛書家出版社（Verlag evangelischer Bücherfreunde）	1931
50	褐色図書同好会（Der Braune Buch-Ring）	1932
51	図書コレクション（Der Bücherschatz）	1933以前
52	図書陳列台（Der Büchertisch）	1933以前

予め用意された複数の本の中から一定数を選んで購入する形式の二種類が見られる。本の生産数と販売数がほぼ一致するという意味では、前者が最もリスクの少ない理想的な形式だと言える。しかし、後者の場合にも、少なくとも一定数の本の購入が義務づけられていることに加え、会員の嗜好に沿った本を提供することも可能であり、ある程度リスクを抑えることができる。

「表２」は、こうしたブッククラブの経済的特性を最も深く追求したクルト・ツィックフェルト（Kurt Zickfeldt）によるブッククラブの分類である。[3] ツィックフェルトは、ブッククラブの本質的な特徴を、「自由な市場から限定した市場経済を作ることによって、生産者と消費者の関係をより確実に形成しようと試みること」[4] に、言い換えれば、「出版社が出版物をもたらすための団体へと消費者をまとめること」[5] に見る。したがって、「ブッククラブを区別する際、それがどのような傾向を追っているのか、あるいは経済以外のどのような理由から成立したのかは、差し当たり問う必要はない」[6] とする。そのような立場から、ツィックフェルトは、まず、「自由な書籍販売」と「限定された書籍販売」という呼び方によって、伝統的な書籍販売とブッククラブを区別し、次いで、「限定された書籍販売」を、「拘束力を持つ購入義務」の有無によって、「狭義のブッククラブ」と「広義のブッククラブ」に区別する。そして、「購入義務」を持つ「狭義のブッククラブ」のうち、「予め決められた特定の本を購入する形式」を「特殊な購入義務」、「予め用意された複数の本の中から一定数を選んで購入する形式」を「一般的な購入義務」と呼んで、区別するのである。また、「広義のブッククラブ」はツィックフェルト独自の分類であり、「専門協会出版社」（Fachvereins-Verlag）が該当するが、これは労働組合や学術団体のような組織と密接に

結びついて、その需要に見合った本を生産・販売する企業である。例えば、ハンザ同盟出版社は、ドイツ民族商業補助者連合の出版部門であり、もっぱらこの連合の会員を対象とした本の生産・販売を行った。ツィックフェルトに従って、ここに属する四つの企業もブッククラブに数えるなら、1945年以前のドイツにおけるブッククラブの数は、把握し得る範囲で、総計56となる。表の下段の「自由な書籍販売のブッククラブ」、すなわち伝統的な書籍販売のブッククラブについては後述する。なお、ブッククラブが本の価格を低く抑えられるもう一つの重要な要因として、小売店を経ない販売方法があげられる。ブッククラブの本は、郵送によって会員に直接送付されるか、または関連団体の事務所や、ボランティアの会員を通じて引き渡された。そのため、通常の書籍販売において、卸売業や小売業に支払われるマージンの分だけ、価格を低く抑えられたのである。[7)]

表２：ツィックフェルトによる分類

限定された書籍販売のブッククラブ		
	①拘束力を持つ購入義務を伴う狭義のブッククラブ	
		(A) 特殊な購入義務
		愛書家国民連合
		図書コレクション
		ボン図書同好会
		ヴォルフラム同盟家庭文庫
		聖ヨセフ図書協会
		グーテンベルク図書協会
		ブックサークル
		国民劇場・出版販売協会
		(B) 一般的な購入義務
		ドイツ図書共同体
		図書同好会
		ドイツ文化共同体
		アーダルベルト・シュティフター協会図書共同体
	②拘束力を持つ購入義務を伴わない広義のブッククラブ	
		専門協会出版社
		ドイツ技術者協会出版社
		化学出版社
		職場長連合出版社
		ハンザ同盟出版社
自由な書籍販売のブッククラブ		
		ドイツ図書購買共同体
		図書同盟
		ドイツ巨匠同盟
		プロテスタント図書同好会
		フォス書店＜牧神文庫＞

ところで、こうした形の販売によって、実際のところ、伝統的な書籍販売とブッククラブの間に、どの程度の価格差があったのだろうか。この点、ツィックフェルトによれば、刊行数が300,000部の場合、自由な書籍業での店頭価格が3.6～4.6マルクなのに対して、「愛書家国民連合」での価格は3.1マルクであり、その差は0.5～1.5マルクで、14～33パーセント安かった。[8)] また、同時代の他の論考でも、ブッククラブの本は店頭価格より約30パーセント安いとされている。[9)] この他にも、1925年から1933年にかけて、本の平均小売価格がおおよそ5.4マルクだったのに対し、ブッククラブの本はおおよそ３マルクかそれ以下という、半額近い値段だったとの指摘もなされている。[10)] その上、ブッククラブの本は多くが装丁も立派なものであり、ブッククラブによっては定期的に刊行される雑誌も無料で

提供され、それ以外にも様々な特典が提供されることが少なくなかったため、小売店と比べた場合の割安感はかなり大きいものだったと推察される。

内容的特質

次に、内容的な側面に目を向けたとき、注目に値するのは、ブッククラブが伝統的な書籍販売では十分に考慮されなかった様々な政治的、文化的、宗教的潮流をカバーしたということである。ただし、それはすべてのブッククラブがそうした多様な内容の本を扱っていたということではない。そうではなく、個々のブッククラブは、むしろ内容を特化し、同じような関心や考え方を持つ人々を会員として集めようとした。では、具体的にどのような内容が扱われたのだろうか。その一例を示したのが、「表３」である。ここにあげたのは、ウルバン・ファン・メリス（Urban van Melis）によるワイマール共和国時代のブッククラブの分類だが[11]、1945年以前のブッククラブの内容的分類を示した先行研究の中では最も典型的なものと言える。そこで、この分類に基づいて、ワイマール共和国時代のブッククラブの方向性を見てみたい。

まず、「市民的な読者を持つブッククラブ」に属するのは、戦争とインフレで貧しくなった市民層を対象としたブッククラブである。中でも「愛書家国民連合」と「ドイツ図書共同体」がこのグループの代表格であり、他のすべてのブッククラブを圧倒する会員数を獲得した。このグループの思想的特質は、むしろ特定の思想を持たず、イ

表３：メリスによる分類

市民的な読者を持つブッククラブ	
	愛書家国民連合
	ドイツ図書共同体
	図書陳列台
	愛好家サークル
	ドイツ・ブッククラブ
	図書同好会
	ドイツ国民文庫
	ドイツ図書協会＜ノイラント＞
	南ドイツ図書共同体
特殊な読者を持つブッククラブ	
	アーダルベルト・シュティフター協会図書共同体
	フォス書店＜牧神文庫＞
	国民劇場・出版販売協会
	ロマン主義同好会
宗教的ブッククラブ	
	プロテスタント図書同好会
	ボン図書同好会
	シオニズム図書同盟
	ハイネ同盟
保守的・国家的ブッククラブ	
	祖国文化会の＜文化会文庫＞
	ドイツ文化共同体
	国民図書協会
	民族ドイツ図書同好会
	褐色図書同好会
左翼の労働者ブッククラブ	
	グーテンベルク図書協会
	万人のためのウニヴェルズム文庫
	国民図書同好会
	自由愛書家協会
	マルクス主義図書協会
	ブックサークル
書籍販売のブッククラブ	
	ドイツ図書購買共同体

デオロギー的な中立性を保ったことにあり、提供される本の内容も、おおむね伝統的な文学のカノンに従っていた。[12)]

「特殊な読者を持つブッククラブ」は、きわめて限定された関心を持つ少数の読者を対象としたブッククラブである。「アーダルベルト・シュティフター協会図書共同体」ではズデーテン地方（当時のチェコスロバキアのドイツ人居住区）におけるドイツ思想、「フォス書店＜牧神文庫＞」では狩猟と自然、「国民劇場・出版販売協会」では演劇、「ロマン主義同好会」ではロマン派に関する本が提供された。

「宗教的ブッククラブ」に属するのは、非宗教的な、世俗的な、あるいは思想的に中立的なブッククラブに対する対案として設立されたブッククラブである。このうち、「プロテスタント図書同好会」はプロテスタント的、「ボン図書同好会」はカトリック的、「シオニズム図書同盟」と「ハイネ同盟」はユダヤ的な著作の普及に尽力した。

「保守的・国家的ブッククラブ」には、民族主義的な思想の普及に貢献したブッククラブが分類される。ワイマール共和国時代に設立されたブッククラブに限定したメリスの分類ではあげられていないが、本来このグループを代表するブッククラブは、「ドイツ家庭文庫」であり、設立年は1916年であるものの、第一次世界大戦後に本格的な活動を開始した。また、このグループに属するブッククラブの中でも、「褐色図書同好会」は、ナチス政権を明確に支持した点で際立っていた。

「左翼の労働者ブッククラブ」には、労働者層を対象に、社会主義的な理念の普及に尽力したブッククラブが含まれる。このうち、「グーテンベルク図書協会」と「ブックサークル」は特に社会民主党と、「万人のためのウニヴェルズム文庫」は共産党と、「自由愛書家協会」はアナルコ＝サンジカリズムの労働者組織と密接な関係を持ち、「国民図書同好会」は、自由思想家運動出身の出版人によって設立された。これら左翼的な内容の本は、当時の書籍の中でも、伝統的な書籍販売において最も軽視されていた。プロレタリア出版社の本の売上は、1930年に至っても本の売上全体の１パーセントに過ぎなかったとされる。[13)]

ところで、このように見たとき、これら五つのタイプを、特定の世界観の有無によって大きく二つに分類することができる。すなわち、最初にあげた「市民的な読者を持つブッククラブ」を「世界観的に中立的なブッククラブ」とし、それ以外の四つのタイプのブッククラブを「特定の世界観を持つブッククラブ」としてまとめることである。そして、上記のように、「市民的な読者を持つブッククラブ」において提供された本の内容が概ね伝統的な文学のカノンに従っていたことを考慮すれば、ワイマール共和国時代のブッククラブのうち、本来の意味で伝統的な書籍販売に対する内容的対案をなしたのは、「特定の世界観を持つブッククラブ」であったと言える。

伝統的な書籍販売に対する脅威

以上のように見たとき、ブッククラブは、限定された市場の形成と多様な関心への配慮によって、伝統的な書籍販売に対する「経済的・内容的対案」をなし得たことがわかる。

とりわけ内容的な面では、「特定の世界観を持つブッククラブ」が、伝統的な書籍販売に対する主たる対案をなした。だが、それにもかかわらず、伝統的な書籍販売にとって特に脅威と映ったのは、むしろ「世界観的に中立的なブッククラブ」であった。というのも、両者の間には、会員数の点で大きな違いがあったからである。具体的に言うと、「世界観的に中立的なブッククラブ」の代表格である「愛書家国民連合」が1931年までに750,000人を獲得したのに対し、「特定の世界観を持つブッククラブ」の中では、「グーテンベルク図書協会」が1933年までに85,000人を獲得したのが最大であり、その差は歴然としていた。こうした会員数の多さに加え、「世界観的に中立的なブッククラブ」の場合、伝統的な文学のカノンに従った本の内容も、伝統的な書籍販売のそれと重なっていたため、なおさら伝統的な書籍販売には、「世界観的に中立的なブッククラブ」によって、その会員数の分だけ売上を奪われていると感じられたのである。両者の対立が最も先鋭化した1925年には、ブッククラブ全体としておよそ1,000,000人の各会員が年間30〜40マルクの本を購入し、そのおよそ半分は予め購入を指定された「義務の巻」であった。そのため、少なくとも15億〜20億マルクの図書購買費がブッククラブによって奪われていると、伝統的な書籍販売には思われた。[14] したがって、伝統的な書籍販売の側からブッククラブの発展を阻止しようとする動きが生じたのも当然である。そこで以下では、1925年前後の時期に焦点を当てて、伝統的な書籍販売がブッククラブに取った対応を中心に、両者の関係を見て行きたい。

当初の静観

ブッククラブの設立は、当初、伝統的な書籍販売に特別な反応を引き起こしはしなかった。「愛書家国民連合」のような会員数の多いブッククラブも特に脅威とは感じられず、既存の著作協会（Schriftenverein）や専門協会出版社と同様、大目に見られた。もっとも、1919年に、「愛書家国民連合」の設立に際してプロイセンの文部大臣コンラート・ヘーニシュ（Konrad Haenisch）が支持を表明したことに対しては、伝統的な書籍販売から抗議の声があがった。社会民主主義の政治家であったヘーニシュは、「愛書家国民連合」がこれまで本を所有することができなかった国民層にも本を普及させようとしていることを評価して推薦文を書き、同連合はそれを宣伝パンフレットに引用することで、世間の信用を得たのである。とはいえ、伝統的な書籍販売がこのことを問題視したのは、国家による私企業の優遇という観点からであって、ブッククラブの活動自体が非難されたわけではなかった。ただし、こうした伝統的な書籍販売の余裕のある態度は、裏を返せば、うぬぼれと無知の表れでもあった。つまり、この時点では、ブッククラブが伝統的な書籍販売にとって持ち得る危険性が、まだ気づかれていなかったのである。

状況が変わったのは、通貨改革によって経済が安定した1924年である。この年、ドイツで一気に七つかそれ以上のブッククラブが設立されたことに加え、とりわけ「ドイツ図書共同体」の活動方法が、伝統的な書籍販売の目を啓くことになった。つまり、最初から「義務の巻」を設けず、提供された一定の本の中からすべての会員が自由に選べるようにした

ことと、公的な立場にある人物を引き込む活発な宣伝戦略で成功を収めたことである。これに加えて、伝統的な書籍販売の不安をさらに高めたのは、「ドイツ図書共同体」の会員数の急速な増加が他のブッククラブに悪影響を及ぼさず、ブッククラブが全体として発展を見せたことであった。つまり、そこに集まった人々は、伝統的な書籍販売の小売店で自由に本を買うことよりも、定期的な本の購入を義務づけられるブッククラブの会員となることを優先したのである。

危機感の高まり

こうした状況を前にして、伝統的な書籍販売もようやく危機感を強め、ブッククラブに対する対抗措置を取ることになったが、その最初のきっかけは、「ドイツ図書共同体」の宣伝活動だった。「ドイツ図書共同体」は、設立直後、自らの国民教育的・文化的意義や伝統的な書籍販売に対する経済的長所を記した「覚書」（Denkschrift）を、官庁を始めとする公共施設に持ち込み、推薦を得ることに成功したのである。[15] それを受けて、「ドイツ図書共同体」は、その回状において、同共同体の本の製造、配布、利用に、次のような公的な機関・部署等が関与していると説明した。すなわち、①帝国の内務省、経済省、経済委員会、②各州の経済局、文化局、福祉局、③公共の福祉に資するすべての団体の本部、労働組合、肢体不自由者療養所、保護施設、映画とラジオの催し、といったものである。[16]

こうした措置によって、「ドイツ図書共同体」は、自らが公共の利益に資する企業であるかのような印象を強く与えることができたが、中でも帝国内務省は、1924年４月24日に、その内部文書において、下位の役所に対して「ドイツ図書共同体」への加入を推薦するよう強く勧め、学校でも「ドイツ図書共同体」のための勧誘がなされた。その上、この内部文書が「ドイツ図書共同体」によって宣伝目的で広められたことにより、世の中に対して、まるで国家が「ドイツ図書共同体」の事業を振興しているかのような印象が喚起された。これに対し、伝統的な書籍販売は、上記の「愛書家国民連合」の場合と同様、国家による私企業の優遇に憤慨し、ドイツ書籍販売業株式取引業者組合（Börsenverein der Deutschen Buchhändler 以下、株式取引業者組合と略記する）および個々の書籍販売業者が帝国内務省に抗議を行い、書籍販売業の中央組織も、「かつて帝国官庁から、他の、とりわけ下位の役所に対して、学校で有限会社への加入の宣伝をせよとの要求が出されたことがあっただろうか」[17] と詰め寄った。これを受けて、内務大臣カール・ヤレス（Karl Jarres）は、問題の推薦文から一線を画し、1924年６月28日には、推薦文が送られたすべての職場に対して内務省の通達が送られ、推薦文が同省の承認を受けずに発せられていたことが伝えられた。だが、その間にも推薦文は、かなりの役所が「ドイツ図書共同体」に加入するきっかけとなった。また、「ドイツ図書共同体」の側でも、伝統的な書籍販売の抗議を無視してパンフレットを刊行し続け、その中で帝国と州の様々な職場を引き合いに出した。

「ドイツ図書共同体」のこの妥協のない行動が、ブッククラブに対する伝統的な書籍販売の態度に大きな変化をもたらした。その変化の一例は、「愛書家国民連合」が幾つかのライ

センスの獲得について問い合わせたことに対するゲオルク・ヴェスターマン（Georg Westermann）の反応である。それまで、『ヴェスターマン月刊誌』（Westermanns Monatshefte）に宣伝パンフレットが添えられるなど、両者の関係は良好であったにもかかわらず、ヴェスターマンはライセンスの提供を拒否し、その理由として、「愛書家国民連合」が「ドイツの小売店のみならず、間接的には本を買う読者をもひどく損なう」[18] ことを挙げた。「そうした振る舞いが広く行き渡れば、それは正規の店頭書籍販売の崩壊を、またそれとともに一つの文化的要因の欠落を意味し、本を買う読者自身が、その欠落を最も辛く感じるだろう」[19] というのである。ブッククラブに対して批判的な内容のこの手紙は、株式取引業者組合の機関誌『ベルゼンブラット』（Börsenblatt für den Deutschen Buchhandel）に公開されたが、それは書籍販売業界に対する責任感からだけでなく、ヴェスターマン出版社が「愛書家国民連合」のための宣伝を引き続き行っていたことに対して、同業者から批判の声があがったためでもあった。そのため、この手紙の中で、ヴェスターマンは、『ヴェスターマン月刊誌』の新しい号に「愛書家国民連合」のパンフレットが添えられたことについても、「当社の広告部門の遺憾な見逃しによる」[20] との説明を加えた。

伝統的な書籍販売の俄かな態度の変化を示すもう一つの事例は、J・F・レーマン出版社（J. F. Lehmanns Verlag）が「アルトナ最新ニュース」（Altonaer Neueste Nachrichten）に宛てた、次のような手紙である。

> 残念ながら、当社は、貴社の広告の申し出を利用し得る状況にありません。第一に、貴社が愛書家国民連合のための宣伝記事を掲載しておられるからです。書籍販売は、この国民連合を仇敵とみなさざるを得ません。なぜなら、それは、工場のような本の製造と小売書籍販売の締め出しによって、書籍販売の墓を掘ることだけを目的としているからです。[21]

これまで誰にも邪魔されることがなかった立場がブッククラブによってかなり危険に晒されているという認識は、1924年末には、伝統的な書籍販売にとって一般的な常識となった。ライプツィヒ大学教授で、ジャーナリズムと経営学の専門家であったゲルハルト・メンツ（Gerhard Menz）は、こうした状況を前にして、ブッククラブが製造し販売するすべての本が、未来の出版社の一つからその席を奪い、売れ行きの縮小によって未来の小売店を、そしてまた製造者としての未来の出版社を害すると評した。[22]

実質的長所

こうして、ブッククラブという新たな競争相手に関する動揺は、伝統的な書籍販売の内部で増大した。1925年１月20日の『ベルゼンブラット』に、「集団書籍販売の問題について ── ドイツ図書共同体、愛書家国民連合など」という記事が掲載されたことは、その衝撃の大きさを物語っている。[23] この時点で焦眉の問題となったのは、出版社と作家がブッ

ククラブと協力するべきかどうか、また協力するとすればどのような形でか、ということであった。幾つかの ── とりわけ文学の領域の ── 出版社には、それらの版権のまったく新しい利用の可能性が提供された。例えば、小売店によってすでに十分販売され、その売上がある時点で停滞したような作品について、ブッククラブの一回限りの版のためにライセンスを与えることである。また、作家にとっても、ブッククラブとの協力は大変魅力的だった。というのも、ライセンス版の収益の一部が報酬として手に入るのに加え、ブッククラブの読者の間で知名度を高めることができたからである。さらに、ある作品の版権を直接ブッククラブに譲渡することで、より高い報酬を得ることも可能であった。こうした理由から、エルンスト・モーリッツ・ホイフィヒ（Ernst Moritz Häufig）は、『世界舞台』（Weltbühne）において、伝統的な書籍販売からの攻撃に対して、ブッククラブを弁護した。ブッククラブは、「作家にある程度人間らしい報酬を支払う唯一の出版社だ」[24] というのである。

このように、伝統的な書籍販売全体としてはブッククラブに対する拒絶反応が優勢であった一方で、個々の書籍販売と作家とブッククラブの間には、すでに協力関係が生じていた。例えば、ザムエル・フィッシャー（Samuel Fischer）は、オットー・フラーケ（Otto Flake）の小説『金曜日の子供』（Freitagskind）のライセンスを「ドイツ図書共同体」に与えたことを『ベルゼンブラット』で非難されたが、それに対して弁明の手紙を公刊し、ブッククラブからの魅力的な報酬の提供によって出版社が陥るジレンマを明らかにした。つまり、「作家の懐にかなり大きな収入が入る」ことを考慮して行った「限定された版のための自由化」[25] が、出版社を傷つけるということである。また、「ドイツ図書共同体」の会員雑誌『ツァイトゥングスブーフ』（Das Zeitungsbuch）と『読書の時間』（Die Lesestunde）では、1925年から翌年にかけて、版権を持つ出版社の許可を得て、ヘルマン・ヘッセ（Hermann Hesse）、クラブント（Klabund）、ハインリヒ・マン（Heinrich Mann）、ヴィル・フェスパー（Will Vesper）、ブルーノ・フランク（Bruno Frank）、リカルダ・フーフ（Ricarda Huch）の短編小説や詩が掲載されたが、こうした措置は、ブッククラブにとって文化的アクチュアリティーのイメージを喚起するのに役立ったと同時に、出版社と作家にとっても、通常接近することが難しい読者の間に作品を宣伝できるというメリットをもたらした。[26]

さらに、作家とブッククラブの直接的な協力に関して興味深いのは、リオン・フォイヒトヴァンガー（Lion Feuchtwanger）のケースである。フォイヒトヴァンガーは、1922年５月に完成した『ユダヤ人ジュース』（Jud Süß）の原稿を、「愛書家国民連合」に提供した。連合の原稿審査委員は、内容が適切でないという理由でこの原稿を却下したものの、フォイヒトヴァンガーに対して同連合の会員の文学的趣味に合うような別な原稿を求め、その結果、『醜い侯爵夫人マルガレーテ・マウルタッシュ』（Die häßliche Herzogin Margarete Maultasch）が成立し、それは大成功を収め、「愛書家国民連合」の急速な成長に貢献したのであった。[27] この事例は、「愛書家国民連合」が、すでに早い時期から、著作権切れの作品の再販とライセンス版の刊行と並んで、オリジナルな出版活動を開始していたこと、と同時に、それがいかに狙いを定めて、危険を冒すことなくなされたかを示している。もう

一つの事例は、1925年に「ボン図書同好会」から刊行された、オスカー・マリア・グラーフ（Oskar Maria Graf）の小説『試練』（Die Heimsuchung）をめぐるエピソードである。1966年に刊行されたグラーフの伝記によれば、「ボン図書同好会」は、ブッククラブのオリジナル版として刊行するために、彼に一冊の本を書くよう求めたが、その際、1924年にヘルダー出版社（Herder Verlag）で刊行された『夢占い師』（Traumdeuter）と同じような内容であることを希望すると同時に、10,000マルクの報酬が、半分は契約の際に、残りは原稿の引き渡しの際に支払われることを伝えた。この本は３マルクの価格で50,000部刊行されたため、10,000マルクは売上の6.7パーセントに当たり、当時一般的であった店頭価格の10パーセントの報酬をかなり下回ってはいたが、作家にとって、それを本の販売に先立って手に入れられることは、大きな利点であった。[28)]

共存の可能性

ところで、ブッククラブの興隆によって存続を脅かされているという伝統的な書籍販売の危機感そのものは、果たして正当なものだったのだろうか。この点で注目されるのは、ブッククラブと伝統的な書籍販売の対立が先鋭化した1925年の時点で、「愛書家国民連合」と「ドイツ図書共同体」を合わせた会員数がおよそ550,000人にのぼっていたことである。一般の書籍販売において、本格的な装丁の文学作品を同じ部数販売するのが決して容易ではないことを考慮すれば、伝統的な書籍販売にとってブッククラブがいかに脅威と感じられたかが窺われるであろう。ただし、それはあくまでもそのように「感じられた」ということに過ぎず、事実がどうであったかどうかは別問題であり、逆に、ブッククラブが伝統的な書籍販売の顧客を奪うことはなかったという見解も見られる。つまり、ブッククラブの会員は、もともと小売店で本を買う習慣がなかったり、期待する本が小売店で見いだせなかったりした人々であり、小売店とブッククラブでは顧客層が違っていたというのである。[29)]

実際、「ドイツ図書共同体」もまたそのような立場をとり、そこに、伝統的な書籍販売との共存の可能性を見ていた。そして、会員250,000人達成の記念号となった1925年９月15日の『ツァイトゥングスブーフ』において、「精神的ドイツの指導的人物がドイツ図書共同体について語る」として、ヘルマン・バール（Hermann Bahr）、ゲルハルト・ハウプトマン（Gerhart Hauptmann）、トーマス・マン（Thomas Mann）、ヘルマン・シュテーア（Hermann Stehr）、ヤーコプ・ヴァッサーマン（Jakob Wassermann）、シュテファン・ツヴァイク（Stefan Zweig）といった著名な作家のほか、ドイツ公務員同盟（Der Deutsche Beamtenbund）、ドイツ博物館（Deutsches Museum）、ベルリン教員連盟（Der Lehrerverband Berlin）、ドイツ地方公務員・職員全国同盟（Reichsbund der Kommunal-beamten und Angestellten Deutschlands）など、ドイツの文化生活にかかわる30以上の個人と公的団体からの祝辞を掲げるとともに[30)]、「ドイツ図書共同体の道」と題する論説を掲載し、書籍販売の新しい状況、その前提、および推測される発展について、次のように述べた。

社会の中に新しいものが登場するとき、そこには二つしか可能性がない。新しいものが全体の生活の中でそれまで空いたままだった席を占めるか、または、これまで不十分にしか占められていなかった席を征服するかだ。つまり、特定の場所で不十分な組織が、よりよい組織に取って代わられるのだ。それによって社会のごく小さな部分に加えられる損害は、全体のずっと大きな部分に奉仕する利点を持つ新しいものの権利に、いささかも反対しない。

この関係で、ブッククラブの状況はどうだろう。これまで書店だけが人々の本への欲求を満たしていたことに目を向けると、私たちのブッククラブがこれまで占められていた席に足を踏み入れること、少なくとも部分的には書籍販売業者を排除することが問題となると思われるかも知れない。だが、私たちがこの席を前任者よりもよりよく、より完全に、より実り多く満たし得るなら、私たちの存在の正当性に対する異議は少しも出されないだろう。しかし、もっと大きな問題は、そもそもそれがこの出来事に対する正しい態度なのかということである。私たちのブッククラブがむしろ従来占められていなかった席を占めるなら、それは、その組織の特別な力によって、とりわけそれが書店とは反対に価値のある作品を提供する安さによって、書籍販売にとって従来考慮に入らなかったまったく新しい人々のグループを、読者として征服するのではないだろうか。事実、ブッククラブの効果における最も重要な部分は、そのように特徴づけられる。つまり、この意味で、ブッククラブが従来の書籍販売から席を奪うことはいささかもない。それは、これまで空席であったが、文化共同体の関心において占められねばならない席を占めるのである。

本への読者の欲求がなぜ長い間ブッククラブ組織と書籍販売によって同時に満足させられるべきでなかったのか、これもまったく理解され得ない。ここでも、本来二つの可能性しかない。読者が書店へ行くお金を持たず、ブッククラブの条件でしか本を手に入れられない場合が一つ。ここでは、私たちの組織は、店の所有者を少しも損なうことなく、役に立つ。もう一つは、ブッククラブの会員が、書店で本を買うのに十分なお金を持つ場合である。その場合、私たちの共同体を通じた本の購入は、会員にとって、他のすべての関心を排除する満足感というよりも、むしろより大規模な本の所有への刺激となる。もちろん、私たちのブッククラブは、叢書を拡充するためにどれほど努力し成功しようとも常に、測り難い大きな世界文学から一つの選集しか提供できないだろう。しかし、例えば、一人の現代作家を私たちのブッククラブの本で知った── そして彼の財力がそもそも更なる本の獲得を彼に許す── 読者は、広く自由な書籍販売で刊行されているこの作家の作品も手に入れたいと欲するだろう。したがって、ドイツ図書共同体は、私たちの裕福な人々をまさに書店のための購入者へと養成するのである。彼らがいなければ、そもそも本は買われない。小売店でも買われないのだ。つまり、ブッククラブは、社会に新しく生まれる価値あるものにとって避けられないことがとても多い悲劇的な必然性とは、まったく無縁である。すなわち、他の存在を排除したり、その仕事を奪ったりすることはない。店での古い直接の書籍

販売とブッククラブによる組織された書籍購入は、文化的民族を満足させるために、ずっと先まで、並んでその席を占めるだろう。[31)]

こうして、本来「ドイツ図書共同体」の会員に向けられたこの論説は、内容的には、伝統的な書籍販売に向けられ、ブッククラブの意義を明らかにすると同時に、伝統的な書籍販売の不十分さを指摘した。つまり、伝統的な書籍販売の外部に、十分に開拓されていない大きな本の市場があること、その市場は端の方で伝統的な書籍販売のそれと交差するに過ぎないこと、したがって、ブッククラブと伝統的な書籍販売の競合はごく一部に過ぎず、相互に排除し合う競争は生じ得ないこと、要するに、ブッククラブの活動は、本の市場全体の開発と拡大につながるのだということである。このような見解が正しいとすれば、ブッククラブは伝統的な書籍販売にとって脅威とならないばかりか、むしろ多くの新しい本の買い手を見出したのであり、ブッククラブの発展は書籍販売全体にとって大いに歓迎すべきことだったはずである。[32)] しかし、当時、伝統的な書籍販売はそのような認識に至らず、ブッククラブをもっぱら自らの生存を脅かす敵とみなし、是が非でも制圧しようとした。中でも、とりわけ会員数が突出して多い「愛書家国民連合」と「ドイツ図書共同体」を制圧することは、急務と考えられた。

ネガティヴ・キャンペーン

ところが、伝統的な書籍販売にとって、完全に自給自足的なシステムを持つブッククラブとの戦いは、容易ではなかった。例えば、ブッククラブには株式取引業者組合に入る必要がないため、その受け入れ拒否やそこからの除名といった手段は効果がない。また、ブッククラブは自ら本を生産しているため、出版社や卸売業者が本の引き渡しを拒否しても応えないし、独自の販売方法を採っているため、小売店による販売拒否も意味をなさない。そのため、ブッククラブに対する戦いは、間接的な妨害行動という形を取るしかなかったが、その際、売上の減少という経済的な、見方によっては利己的な理由を表に出すことは憚られた。そこで、伝統的な書籍販売は、もっぱら書籍販売の文化的責務という問題を前面に出すことで、世の中に訴えようとした。つまり、ブッククラブは健全な読書文化を損なっており、書籍販売を担うに値しないと主張したのである。その根拠は、(1) ブッククラブは会員となった限られた読者だけを相手にし、国民全体に奉仕しない、(2) ブッククラブは予め選定された本を提供し、個々の読者の関心に応じた適切な本の提供を行わない、(3) ブッククラブの多くはライセンス版を刊行し、新しい才能の発掘に消極的である、(4) ブッククラブの本の価格も、実際にはそれほど安いとは言えない、といったものだった。[33)] こうした理由は、むろん必ずしも正当なものではなかった。例えば、ブルーノ・トラーヴェン（Bruno Traven）やフリードリヒ・ヴォルフ（Friedrich Wolf）のように、ブッククラブとの協力によって初めて世に認められた作家もいた。[34)] また、ブッククラブの本の長所は、伝統的な書籍販売の側でも認められており、例えば、株式取引業者組合の支配

人アルベルト・ヘス（Albert Hess）は、「愛書家国民連合」による安価な本の制作に対する驚きを指導部のメンバーに隠さなかった。

> 次回の指導部会合でお見せするが、国民連合（原文のまま：引用者注）の最近の刊行物、つまりアート紙に非常に良い複写が多数なされている芸術学の作品は、通常の書籍販売なら少なくとも８～９マルクするだろうが、国民連合によって、いわゆる会員に、3.5マルクで販売された。この本は、外面的にも内容的にも、いかなる点でも非の打ち所がない。300,000部という部数を保証されて刊行されることを考慮しても、価格の低さは驚きを喚起する。[35)]

だが、ブッククラブの本に対するこうした肯定的な評価が公にされることはなかった。伝統的な書籍販売にとって重要なことは、世間に対してブッククラブのイメージを損なうことであり、その根拠が事実に合致しているかどうかは問題ではなかったのだ。ここで、ブッククラブに対して否定的なイメージを喚起する文章の一例として、後述する伝統的な書籍販売のブッククラブ設立にあたり、国務大臣アルベルト・ズューデクム（Albert Südekum）が述べた祝辞の一部をあげておきたい。

> 私たちドイツ書籍販売の将来が、そのすべての部門において、大きな購買層の組織化にかかっているという認識は、私には新しいものではありません。私は、それを目指す企業を興味深く注視し、それどころか、いわゆる「愛書家国民連合」に会員として加わりました。この企業は大変親切で、代表者の一人を寄越し、団体の長所とその効果の詳細を説明してくれました。最近私は、私の判断するところ文学的にまったく価値がない小説が、「義務の巻」として、あまり趣味のよくない装丁と、部数の多さに鑑みれば高すぎると感じられ、業務に通じた印刷業者も実際非常に高いことを確認した値段で送られたとき、業務管理部と手紙のやり取りを行いました。この機会に、私は、そもそもいかなる権利を持ってこの企業が「連合」と称しているのかを知ろうとし、会員としての私に帳簿と計算を検査させてもらえるかどうか問い合わせましたが、それは拒否されました。今日なお、私は、そもそもこの企業の背後に誰がおり、私の見積もりではきわめて高額な「連合」の黒字がどこへ流れているのか、知りません。これはあり得ない状況です。個別のよい業績をどれほど認めようと、まったく連合ではなく、その告知が基本的に匿名でなされ、その「会員」に業務管理を覗くことを拒否する「連合」の会員であることはできません。それゆえ私は、それとの関係を解消しました。[36)]

株式取引業者組合の介入

ところで、伝統的な書籍販売がこのようにブッククラブに反対する措置をとった際、そ

の利益代表としての株式取引業者組合は、当初、ブッククラブへの対抗措置を取ることは自らの課題ではないという立場だった。

> 報告の年（1924年）に成功した「ドイツ図書共同体」の設立、比較的古いが今特に活発な「愛書家国民連合」の努力、および特に被用者の組織によって誕生させられた同じような企業の努力、それらは疑いなく、通常の書籍販売の最初の危機である。（中略）様々な方面から、株式取引業者組合が行動し、この企業の競争から会員を守らねばならないという願いが大きくなった。これに対し、当組合はこの発展そのものに反対していかなる影響を及ぼす権利も持たないというのが、理事会の考えであったし、今もそうである。[37)]

しかし、この控え目な態度は長続きせず、やがて株式取引業者組合自身、ブッククラブに反対する措置を実行するようになるが、それは、一方では軽視することでブッククラブの意味を引き下げようとしながら、他方では世間に向かって広く批判するという、矛盾する二通りの方法でなされた。例えば、株式取引業者組合の支配人代理クルト・ルンゲ（Kurt Runge）は、ドイツ出版社協会に対して、ブッククラブにできるだけ公の注目を与えないよう要請した。

> ドイツ出版社協会が、その会員に対して、書評サンプルの送付の際に、新聞出版社ないし編集者に、ドイツ書籍販売の新刊の書評を部外者の生産と一緒に刊行しないよう強く要請することが勧められる。[38)]

だがその一方で、『ベルゼンブラット』には、ブッククラブに反対する数多くの記事が掲載され、その有害な影響に関する広い論争が行われた。そこでは、ブッククラブを肯定的に評価し過ぎているとみなされた新聞雑誌の論評が反駁され、ブッククラブの宣伝活動に対して妨害措置を講じることさえ促された。[39)]

ただし、この二通りの措置のうち、株式取引業者組合にとって、後者のやり方でブッククラブに対して批判的な世論を形成することの方がより重要だったことは、『ベルゼンブラット』以外の場でも、ブッククラブに批判的な論説の刊行を支援したことに見て取れる。その一つは、ミュンヒェンのハンス・フォン・ヴェーバー出版社（Hans von Weber Verlag）で刊行されたエーバーハルト・ヴァイスケーニヒ（Eberhard Weißkönig）の『特許を与えられた趣味のためのデパート』（Warenhaus für patentierten Geschmack）であり、株式取引業者組合は、これを100部注文した。[40)] もう一つは、ライプツィヒのフィリップ・レクラム出版社（Philipp Reclam junior）の雑誌『レクラムの宇宙』（Reclams Universum）に刊行された論説「毎月の教養一人前！」（Monatlich eine Portion Bildung!）であり、株式取引業者組合は、その特別版の刊行のための財政的援助を行った。[41)] こうした個別の出版社に対する支援は、本来組合員に対する中立性を保ち、組合員全員の利益を考慮すべき株式取引業者組合が、

その原則を破ってまでもブッククラブに反対するキャンペーンを優先した事例として、注目に値する。

ところで、ブッククラブに反対するこうした措置は、ブッククラブの側からの批判を招くことも少なくなく、伝統的な書籍販売の施設または代表者に対して、「ドイツ図書共同体」からは少なくとも６件の、「愛書家国民連合」からは少なくとも12件の訴訟が起こされた。そして、これらの訴訟においても、株式取引業者組合は、組合員である書籍販売業者を支援した。例えば、シュテルクラーデ（Sterkrade）のある書籍印刷業者に対して、「愛書家国民連合」に対する訴訟に可能な限りの備えをするため、法律上の助言と広範な情報を与えた。[42] また、「ドイツ図書共同体」に対するダンツィヒの書籍販売業者の訴訟においては、必要な控訴審手続きのための弁護士費用を引き受けた。[43] しかし、後述のように、これらすべての訴訟において、ブッククラブ側の正当性が認められたため、ブッククラブに対するネガティヴ・キャンペーンは、ほとんど奏功しなかった。

ボイコット

このような事態を前にして、伝統的な書籍販売は、より一層過激な措置へと向かった。それは、ブッククラブで本を刊行している作家に対するボイコットである。この措置は、すでに1925年２月にドイツ出版社協会によって議論されていたが、その後、ドイツ書籍販売業協会も、同年５月９日の総会で、「ドイツの小売店は、自らの利益と広い国民層の趣味の形成という利益のため、ブッククラブの協力者であるような作家の作品の普及には尽力しない」[44] ことを決定し、これを受けて、株式取引業者組合もこの方針を支援した。

具体的な方法としては、最初、株式取引業者組合に組織された小売店に、ブッククラブで出版している作家のリストを密かに送付し、それらの作家の作品を販売しないよう求めることが考えられたが、実行されなかった。その理由は、秘密が保たれなかった場合に、株式取引業者組合およびその他の書籍販売組織がブッククラブの安価な版による精神的価値の普及を妨げているとの批判を受け、株式取引業者組合の評判が下がることが懸念されたためである。そこで逆に、そのリストを公にすることが決定され、1925年７月９日の『ベルゼンブラット』に、「事務所に存在する資料によって＜ブッククラブ＞とみなされる企業の一覧表が、ブッククラブですでに刊行されている文学（古典は除く）の一覧表を含めて」[45] 公表された。その際、出版社の作品の一覧表と並んで、出版社の住所が、また部分的には会社の形式または他の施設との結びつきも公表された。株式取引業者組合は、純粋な情報提供であるという論拠で批判を退けられると考えていたが、この措置は、実質的にはブラックリストの公表であり、作家協会からも文壇からも批判を受けた。

その後、株式取引業者組合、ドイツ出版社協会、およびドイツ書籍販売業協会は、作家との関係を改善するべく、1925年８月に、ドイツ作家保護協会およびドイツ舞台作家・作曲家協会と協議を行い、次のような共同の声明を出した。

作家の自由は、いかなる方法によっても、いかなる側からも、制限されてはならない。それゆえ、書籍販売協会は、公表によって作家の私的権利を制限することは、今も今後も行わない。したがって、この公表からいかなる結果も引き出されてはならない。[46)]

これにより、ブッククラブとの協力を理由に作家活動を制限する試みは挫折した。だが、小売店にとっては、こうしたボイコットを続けることは、そもそも不可能であった。というのも、その間に、伝統的な書籍販売とブッククラブの両方で本を刊行する作家の数が著しく増えていたからである。

訴　訟

以上のような、ブッククラブに対する伝統的な書籍販売の攻撃の結末は、最終的に、訴訟での和解という形でつけられた。「愛書家国民連合」と「ドイツ図書共同体」はともに、作家へのボイコットの呼びかけを黙認したという理由で、株式取引業者組合を相手取って、ベルリンで訴訟を起こした。そして、裁判長の提案に従って一旦和解が成立したが、1925年12月４日を期限とするそのための手続きは挫折した。これを受けて、1926年４月９日、ベルリンの地方裁判所は、「愛書家国民連合」と「ドイツ図書共同体」の主張を認めた。これに対し、株式取引業者組合は控訴したが、同年９月15日、差し当たり「愛書家国民連合」との間に和解が成立した。その内容は『ベルゼンブラット』に掲載されたが、次のようなものであった。

ライプツィヒのドイツ書籍販売業株式取引業者組合の理事会は、『ベルゼンブラット』で主張された、ベルリン＝シャルロッテンブルクのヴェークヴァイザー出版社の「愛書家国民連合」の活動が文化の発展を損なうという主張を維持しないことを明らかにする。ベルリン＝シャルロッテンブルクのヴェークヴァイザー出版社の「愛書家国民連合」は、そのシステムが書籍販売の利益に反対する傾向に基づいていないこと、むしろ、古くから保たれている小売書籍販売を、精神的な生産物と国民との間の重要な、価値のある仲介者とみなしていることを明らかにする。ライプツィヒのドイツ書籍販売業株式取引業者組合の理事会は、実施された和議に基づいて、この声明に同意する。

この理由から、ベルリン＝シャルロッテンブルクのヴェークヴァイザー出版社の「愛書家国民連合」とドイツ書籍販売業株式取引業者組合の理事会は、両者の間に進行中の訴訟の調停での和解を結んだ。両者は、将来は、お互いにそれぞれの特性を評価し合って、並んで活動するという希望を表明した。[47)]

「ドイツ図書共同体」との間に同じような和解が成立したのは、それから２年後の1928年５月３日であったが、その際、株式取引業者組合は「ドイツ図書共同体の制作物が、文

化を振興するもの、真面目なものであり、名誉ある出版企業の威厳を有することを認めた。」[48] ブッククラブの信用を落とし、その活動を妨げるための様々な試みを行った後のこのような譲歩は、伝統的な書籍販売にとって敗北に等しいものだった。逆に、ドイツの書籍小売業と出版社の利益代表者が、以前には世間で否認した特性を認めたという事実は、ブッククラブにとっては勝利を意味した。こうして、伝統的な書籍販売にもようやく、ブッククラブを制圧することは不可能であり、将来はそれと折り合って行かねばならないという認識が生じたのであった。株式取引業者組合は、この機会に、係争中のブッククラブとの訴訟をすべて終わらせ、その組合員に対しても、ブッククラブとの対決を可能な限り見合わせるよう警告し、その代わりに、「営業上の業績を競い、法的に許された手段の枠内で顧客へのサービスを競う」[49] ことを求めた。

書籍販売のブッククラブ

だが、伝統的な書籍販売の側では、ネガティヴ・キャンペーンやボイコットの脅迫と並んで、営業上の対抗措置もすでに考えられており、その一つが、伝統的な書籍販売の中にブッククラブと同じ組織を設立することであった。例えば、オラニエンブルクの書籍販売業者ラインハルト・ゲルリング（Reinhard Gerling）は、「ブラックリスト」公表の少し後、つまりブッククラブに反対するキャンペーンの頂点の時期に、株式取引業者組合によって発議され、導かれるブッククラブの提案を行った。[50] また、この時期には、書籍販売と協力して活動するブッククラブ的な企業がすでに存在しており、ゲルリングの提案のモデルとなっていた。例えば、国民と青少年の読書振興のドイツ本部によって設立された「プロテスタント図書共同体」（Evangelische Buchgemeinschaft）はその一つだが、プロテスタント系の出版社の1,000巻以上の本が１冊４マルクで提供され、それらがプロテスタント系の小売店を経て販売されることによって、プロテスタント系の書籍販売の強化に役立っていた。[51] しかし、上記のようなブッククラブと伝統的な書籍販売の対立の高まりの中で、伝統的な書籍販売による対抗措置として実現を見たブッククラブは、「ドイツ図書購買共同体」（Deutsche Buch-Einkaufs-Gemeinschaft）であり、ルッツ・クニーリング（Lutz Knieling）とヴァルター・ショッテ（Walter Schotte）の提案に基づき、株式取引業者組合の強力な支援も受けて、1925年９月１日、出版業者オイゲン・ディーデリヒス（Eugen Diederichs）の名において召集された18の出版社と小売店によって、ライプツィヒで設立された。[52] ただし、同共同体そのものが事業を展開することはできなかったため、同時に、そのための事業を行う「図書購買センター」（Buch-Einkaufs-Zentrale GmbH）も設立された。業務管理には、ショッテとディーデリヒスの他、国務省局長ハンス・マイデンバウアー（Hans Meydenbauer）、ドイツ書籍販売業協会代表者パウル・ニッチュマン（Paul Nitzschmann）、出版業者フェリックス・マイナー（Felix Meiner）、弁護士アドルフ・フォン・ベルク（Adolf von Berg）が責任を負った。

「ドイツ図書購買共同体」では、参加した出版社の在庫の販売と新刊書の予約注文が行わ

れた。いずれの場合も、本がブッククラブ用に装丁を変えられることはなく、価格は本来の店頭価格よりも50〜60パーセントも安かった。会員になるためには、小売店で、入会料１マルクと、毎月の会費1.8マルク、または３ヶ月毎の会費5.4マルクを支払わねばならなかった。また、一年間に少なくとも21.6マルク分の本を購入せねばならなかった。一方、小売店は、「ドイツ図書購買共同体」の本の引き渡し所となるためには、５マルクを支払って、株式取引業者組合かドイツ書籍販売業協会の会員とならねばならなかった。その代わりに、定期的に宣伝用の資料が提供され、本を通常より30パーセント安く仕入れることもできた。また、入会料と会費の徴収を行い、会費のうち30パーセントをリベートとして手に入れ、残り70パーセントと入会料を「図書購買センター」に送った。「図書購買センター」では、送られた会費が各会員の口座に管理された。提供する本の選択は、会員雑誌『本の世界』(Welt der Bücher) の指導部と有力な公共図書館司書が共同で作業を行う文学委員会の推薦に基づいて決定された。小売店は、馴染みの顧客から「ドイツ図書購買共同体」のための会員を勧誘し、会員の注文を「図書購買センター」に伝え、「図書購買センター」は、会員の口座の残高に問題がなければ、注文を当該の出版社に伝えた。小売店への本の送付は、それぞれの出版社の責任でなされた。

このような「ドイツ図書購買共同体」のシステムは、一見、本の生産者、販売者、受容者のすべてに利益をもたらす理想的な販売形式だと思われた。というのも、それは、提供する本に出版社の在庫を充てることで出版社の在庫を減らし、小売店を引き渡し所とすることで小売店に新たな顧客をもたらし、本の購入者には店頭価格の半額近い低価格の本を提供したからである。とりわけ、戦争と革命とインフレによって損害を被った、教養ある年老いた本の購入者層が、再び伝統的な書籍販売に回帰することが期待された。もちろん、他のブッククラブと同じように、会員による新会員の勧誘も奨励され、３名の勧誘毎にカタログ価格で2.5マルクの本が進呈された。

ところが、予想に反して、このブッククラブの発展は滞った。そこには幾つかの要因があったが、最大の要因は、提供された本が魅力を欠いていたことだった。というのも、それらの多くは伝統的な書籍販売の在庫から選ばれたが、それは端的に言えば「売れ残り」であり、本来なら反故にされるか、古書店に譲られる本が、価格を引き下げて提供されたに過ぎないからである。出版社に返品された本を販売業者が買い取り、自由な価格で販売する、いわゆる「新古本」の販売と同じと考えてよいであろう。したがって、ここには、ブッククラブに成功をもたらした二つの要因のうち一つが明らかに欠けていた。つまり、「安い本の提供」は見られるものの、「読者の好みに合った内容の本の提供」は見られなかったのである。しかも、小売店にとっては、売れ行きの悪かった本の販売を再度引き受けねばならない上、顧客に対して、当初の店頭価格とブッククラブの本の価格の違いを十分に説明できないというジレンマもあった。その上、ブッククラブの本の引き渡し所となることで増える雑務、例えば入会金や会費の徴収、本の引き渡しや宣伝などに比べて、利益も少なかった。その結果、「ドイツ図書購買共同体」の試みには、本来必要な小売店からの協力が、期待したほど得られなかった。結局、1926年頃までに、引き渡し所となった小

売店が400、会員はおよそ5,000の個人と団体に留まった。

こうした理由から事業が進捗しなかった上に、事業本部の財務管理の失敗も重なり、「ドイツ図書購買共同体」の経営はたちまち行き詰った。というのも、1926年１月までに、資本金60,000マルクのうち35,000マルクが宣伝と雑費に支出される一方、それに見合った収入は得られなかったからである。そこで、事業本部は、ダッハウのブッククラブ「図書同盟」（Bücher-Bund）からの合併の提案を受け入れて財政のテコ入れを行い、資本金を80,000マルクへと引き上げた。「図書同盟」は、「アインホルン出版社」（Einhorn Verlag）の所有者ヴァルター・ブルームトリット＝ヴァイヒャルト（Walter Blumtritt-Weichardt）によって、1924年に、出版社内部の予約購読として設立されたブッククラブであったが、伝統的な書籍販売の枠外にあるブッククラブに対抗し、小売店と協力して活動していた。合併後、より活発な宣伝活動が行われたが、その頂点は、1926年９月27日から10月５日にかけての「図書週間」（Buchwoche）だった。この間、小売店は、新会員獲得に対して、300マルクを上限とする報奨金を手に入れることができた。だがその際、引き渡し所に「図書同盟」の本を非会員にも販売することが許されたことが、ドイツ書籍販売業の販売規則に違反するとみなされ、他の小売店や株式取引業者組合から批判を蒙った。そして、この宣伝活動そのものも、大きな成功を収めなかった。

こうして、1927年春、「ドイツ図書購買共同体」は解散が決定された。結局、ブッククラブ設立という対抗措置も、伝統的な書籍販売にとって、ブッククラブに対する「防波堤」[53] とならないどころか、自らが批判する書籍販売の方法を実践したことで、そのメリットをよりいっそう際立たせた上、ブッククラブを批判する理由を失い、上記のようなブッククラブとの訴訟にも不利な影響を及ぼすことになってしまった。

ま と め

ブッククラブは、その多くが1919年から1933年というわずかな歳月の間に設立され、発展した。このことは、これらの新しい企業が、第一次世界大戦後の新たな文化的、政治的、社会的現実に適応する用意が欠けた伝統的な書籍販売に対する実際的な対案と理解され、世の中に受け入れられたことを示している。すなわち、安価な本の提供と多様な本の提供というこれまでにない特色が、多くの読者を惹きつけ、ブッククラブに結びつけたのだった。それに対し、書籍販売における独占的な権限に固執し、イメージダウンや作家に対するボイコットの脅迫、およびブッククラブの模倣といった対抗措置によって競争相手を押さえつけようとした伝統的な書籍販売の試みは、ほとんど成功しなかった。こうして、ワイマール共和国時代を通じて、ブッククラブは、伝統的な書籍販売の妨害にもかかわらずその対案として成長を遂げ、もはやブックマーケットの周縁的現象ではなくなり、書籍販売において、伝統的な書籍販売と並んで重要な地位を占め、読書文化の確たる構成要素となったのであった。

本研究はJSPS科研費25370361、および財団法人国際文化交流事業財団人物交流派遣・招聘事業（2012年度派遣）の助成を受けたものである。また、小論の内容の一部については、日本独文学会西日本支部研究発表会（2013年12月８日　於ホルトホール大分）において口頭発表を行った。

注

1）ブッククラブの詳しい定義づけについては、竹岡 2011: 34〜36頁参照。

2）表１にあげたブッククラブのうち三つの団体について、「ドイツにおけるブッククラブ」の枠内で取り上げる理由を補足しておきたい。(1)「カトリック良書普及協会」は、ウィーンのメキタル派によって設立されたものだが、ドイツにおけるブッククラブの先駆的団体と見なされている。(2)「読書向上文庫」は、企画段階に留まり、設立には至らなかったが、その構想の重要性から、多くの先行文献において、実際に設立されたブッククラブと同等の扱いを受けている。(3)「アーダルベルト・シュティフター協会図書共同体」は、チェコスロヴァキアのエーガーで設立されたが、ズデーテン＝ドイツの領域に会員を求め，ズデーテン地方におけるドイツ思想の普及に貢献した。

3）Zickfeldt 1927: S. 58. なお、ツィックフェルトの論文は、小論の対象であるブッククラブと同時代に執筆されたものだが、当時のブッククラブと伝統的な書籍販売の違いについては、参照した文献の中で最も詳しく論じられている。

4）Ebenda, S. 55.

5）Ebenda, S. 56.

6）Ebenda, S. 57.

7）なお、この点については、卸売業や小売店を仲介せずとも、一定の送料は必要なため、それほど大きな差はないという見方もある。Vgl. Runge 1964: S. 226.

8）Vgl. Zickfeldt 1927: S. 94ff.

9）Vgl. Rosin 1926: S. 1.

10）Vgl. Melis 2012: S. 554.

11）Vgl. a. a. O., S. 557-578.

12）ただし、まさにそれゆえに「保守的・国家的ブッククラブ」に近かったとの指摘もなされている。Vgl. DuMont 1961: S. 60.

13）Vgl. Melis 2002: S. 25.

14）この統計的データは、「ドイツ図書購買共同体」を構想したヴァルター・ショッテに拠る。Vgl. Brohm 1999: S. 251.

15）Vgl. ebenda, S. 241ff.

16）Vgl. Zickfeldt 1927: S. 97f.

17）［Anon.］: Stellungsnahme des Börsenvereins gegenüber den Werbemaßnahmen der

Deutschen Buchgemeinschaft GmbH. in Berlin. In: Börsenblatt für den Deutschen Buchhandel (=Bbl.) Jg. 91 (1924), Nr. 139 (16. Juni), S. 8395ff., hier S. 8396. Zitiert nach Brohm 1999: S. 242.

18) Georg Westermann an VdB. In: Bbl. Jg. 91 (1924), Nr. 247 (20. Okt.), S. 14309. Zitiert nach ebenda, S. 243.

19) Ebenda.

20) Ebenda.

21) J. F. Lehmanns an die »Altonaer Neuesten Nachrichte«. In: Bbl. Jg. 91 (1924), Nr. 285 (5. Dez), S. 18203. Zitiert nach ebenda, S. 243.

22) Vgl. Bbl. Jg. 92 (1925), Nr. 1 (2. Jan.), S. 5. Zitiert nach ebenda.

23) Vgl. [Anon.]: Zur Frage: »Kollektivbuchhandel. Deutsche Buchgemeinschaft - Volksverband der Bücherfreunde u. Ä.«. In: Bbl. Jg. 92 (1925), Nr. 16 (20. Jan.), S. 955-964. Zitiert nach ebenda.

24) Ernst Moritz Häufig: Vom Buchhändlerbörsenverein. In: Die Weltbühne. Jg. 21 (1925), S. 107-109, hier S. 108. Zitiert nach ebenda, S. 244.

25) S. Fischer. In: Bbl. Jg. 92 (1925), Nr. 18 (27. Jan.), S. 1405. Zitiert nach ebenda.

26) Vgl. Brohm 1999: S. 239.

27) Vgl. ebenda, S. 244.

28) Vgl. Melis 2002: S. 96f.

29) 例えば、エルツェによれば、「ブッククラブへ向かった購読者層という考えは誤りであったし、今でも誤っている。この読者層を小売店の大部分は所有していなかったし、現在も所有していない」。Oeltze 1977: S. 417. また、ブロームも、「小売書籍販売の顧客はブッククラブの会員と同一視されない」とみなす。Brohm 1999: S. 255.

30) Vgl. Führende Persönlichkeiten des geistigen Deutschland über die Deutsche Buch-Gemeinschaft. In: Das Zeitungsbuch. Nr. 18, 1925: S. 5-12.

31) [Anon.]: Der Weg der Deutschen Buch-Gemeinschaft. In: Das Zeitungsbuch, a. a. O., S. 2-4, hier S. 3f.

32) 例えば、ビグラーによれば、「ブッククラブは、出版社に、本一般に、そして間接的には小売店にも、新しい読者と新しい購入者をもたらした。」Vgl. Bigler 1975: S. 24.

33) Vgl. Melis 2002: S. 232ff.

34) Vgl. ebenda, S. 233.

35) Brief von Hess an die Herren des Vorstands vom 22. Juni 1925 (Sächsisches Staatsarchiv Leipzig, Bv. 353, ohne Paginierung). Zitiert nach ebenda, S. 234.

36) Dr. Südekum: Gruß an die B. E. G. In: Welt der Bücher. Nr. 1. (15. Dez.) 1925, S. 1f., hier S. 1. なお、小論の参考文献の一つであるハンス・ローズィンの1926年の論考も、「教養の育成」という点でブッククラブの欠点を批判した上、伝統的な書籍販売に

よるブッククラブである「ドイツ図書購買共同体」の意義を強調したものであり、こうしたネガティヴ・キャンペーンの一例とみなされ得る。

37）［Anon.］: Geschäftsbericht des Vorstandes des Börsenvereins der Deutschen Buchhändler zu Leipzig über das Vereinsjahr 1924/1925. Zu erstatten in der Hauptversammlung des Börsenvereins der Deutschen Buchhändler zu Leipzig am Sonntag Kantate, dem 10. Mai 1925. In: Bbl. 92（1925）, Nr. 92（21. Apr.）, S. 6587-6602, hier S. 6593. Zitiert nach Melis 2002: S. 235.

38）Brief vom 5. August 1925（Sächsisches Staatsarchiv Leipzig, Bv 351, ohne Paginierung）. Zitiert nach ebenda, S. 235f.

39）Vgl. Melis 2002: S. 236.

40）Vgl. ebenda, S. 236f.

41）Vgl. ebenda, S. 237.

42）Vgl. ebenda.

43）Vgl. ebenda, S. 238.

44）Protokoll über die Verhandlungen der ordentlichen Hauptversammlung des Börsenvereins der Deutschen Buchhändler zu Leipzig am Sonntag Kantate, dem 10. Mai 1925, im Deutschen Buchhändlerhaus zu Leipzig. Entschliessung betr. Buchgemeinschaften. In: Bbl. 92（1925）, Nr. 111, S. 7859-7863, hier S. 7863. Zitiert nach Melis 2012: S. 582.

45）［Albert］Hess: Bekanntmachung. In: Bbl. 92（1925）, Nr. 158, S. 10865ff, hier S. 10865. Zitiert nach ebenda, S. 582f.

46）Vgl. das Protokoll dieser Zusammenkunft（Sächsisches Staatsarchiv Leipzig, Bv 355, ohne Paginierung）. Zitiert nach ebenda, S. 583f.

47）［Anon.］: Vergleich zwischen dem Börsenverein des Deutschen Buchhandels und dem Volksverband der Bücherfreunde. In: Bbl. Jg. 93（1926）, Nr. 230（２. Okt.）, S. 1185. Zitiert nach Brohm 1999: S. 249.

48）［Anon.］: Vergleich zwischen dem Börsenverein des Deutschen Buchhandels und der Deutschen Buchgemeinschaft. In: Bbl. Jg. 95（1928）, Nr. 108（10. Mai）, S. 513. Zitiert nach ebenda.

49）［Anon.］: Buchgemeinden und Buchhandel. In: Bbl. Jg. 92（1925）, Nr. 254（30. Okt）. Zitiert nach ebenda, S. 250.

50）Vgl. Brohm 1999: S. 250.

51）Vgl. ebenda, S. 250f.

52）「ドイツ図書購買共同体」と「図書同盟」に関する以下の記述は、次を参照。Vgl. Zickfeldt 1927: S. 101f.; Brohm 1999: S. 251ff.; Melis 2002: S. 128ff.; Melis 2012: S. 576.

53）Rundbrief von Albert Hess: Betr.: Gründung einer Gegenorganisation gegen die Buchgemeinschaften an die Vorstandsmitglieder des Börsenvereins vom 3. September 1925（Sächsisches Staatsarchiv Leipzig, Bv 348, S.38-43, hier S. 42）. Zitiert nach Melis

2012: S. 576.

主要参考文献（年代順）

Das Zeitungsbuch. Nr. 18. (15. Sep.) 1925.

Welt der Bücher. Nr. 1. (15. Dez.) 1925.

Rosin, Hans: „Buchgemeinschaft“ und Bildungspflege. Stettin: Verlag „Bücherei und Bildungspflege“ 1926.

Zickfeldt, Kurt: Die Umgestaltung des Buchmarktes durch Buchgemeinschaften und Fachvereinsverlage in Zusammenhang mit den Plänen und Versuchen der Sozialisierung und Verstaatlichung des Buchwesens. Osterwieck am Harz: A. W. Zickfeldt 1927.

Hütterbügel, J: Buchgemeinschaften. In: Lexikon für Theologie und Kirche. Hrsg. von Josef Höfer und Karl Rahner. Freiburg: Herder 1958, Band 2, S. 744f.

Strauß, Wolfgang: Die deutschen Buchgemeinschaften. In: Der deutsche Buchhandel. Wesen・Gestalt・Aufgabe. Hrsg. von Helmut Hiller und Wolfgang Strauß. Gütersloh: C. Bertelsmann 1961, S. 259-271.

DuMont, Reinhold Neven: Die Kollektivierung des literarischen Konsums in der modernen Gesellschaft durch die Arbeit der Buchgemeinschaften. (Freiburg Univ. Diss.) Köln 1961.

Runge, Kurt: Die Buchgemeinschaft und ihre Problematik. In: Das Recht am Geistesgut. Studien zum Urheber-, Verlags- und Presserecht. Eine Festschrift für Walter Bappert. Hrsg. von Fritz Hodeige. Freiburg: Verlag Rombach 1964, S. 219-242.

Rüppel, Rudolf: Christliche Buchgemeinschaften in Europa und in den USA. In: Bertelsmann Briefe (Juli 1964), Heft 31, S. 1-6.

Hiller, Helmut: Zur Sozialgeschichte von Buch und Buchhandel. Bonn: H. Bouvier u. Co. Verlag 1966.

Ehni, Gunter/ Weissbach, Frank: Buchgemeinschaften in Deutschland. Hamburg: Verlag für Buchmarkt-Forschung 1967.

Hiller, Helmut: Bücher billiger. München: Buch und Öffentlichkeit e. V. [um 1968].

Strauß, Wolfgang: Bemerkungen zur gesellschaftlichen Relevanz von Buchgemeinschaften. In: Beiträge zur Geschichte des Buches und seiner Funktion in der Gesellschaft: Festschrift für Hans Widmann zum 65. Geburtstag am 28. März 1973. Hrsg. von Alfred Świerk. Stuttgart: Anton Hiersemann 1974, S. 280-290.

Bigler, Rolf R.: Literatur im Abonnement. Die Arbeit der Buchgemeinschaften in der Bundesrepublik Deutschland. Gütersloh: Bertelsmann 1975.

Widmann, Hans: Geschichte des Buchhandels. Wiesbaden: Otto Harrassowitz 1975.

Oeltze, Otto: Die Buchgemeinschaften. In: Handbuch des Buchhandels. Bd. 4. Übrige Formen des Bucheinzelhandels – Zwischenbuchhandel und Buchgemeinschaft. Hrsg. u. Red. von

Friedrich-Wilhelm Schaper. Wiesbaden/ Gütersloh: Verlag für Buchmarkt-Forschung 1977, S. 406-453.

Bühnemann, Michael/ Friedrich, Thomas: Zur Geschichte der Buchgemeinschaften der Arbeiterbewegung in der Weimarer Republik. In: Wem gehört die Welt ── Kunst und Gesellschaft in der Weimarer Republik. Berlin: Neue Gesellschaft für Bildende Kunst 1977, S. 364-397.

Böck, Max: Die Auswirkungen neuer Markt- und Vertriebsformen auf Preisbindung und Sortiment. München: Verlag V. Florentz 1980.

Buchgemeinschaften der Arbeiterbewegung in der Weimarer Republik. Ein Bestandverzeichnis. Hrsg. von der Bibliothek des Archivs der sozialen Demokratie, Friedrich-Ebert-Stiftung; Red. von Rüdiger Zimmermann. Bonn: Friedrich-Ebert-Stiftung 1982.

Scholl, Bernadette: Bürgerlich orientierte Buchgemeinschaften. In: Buchgestaltung in Deutschland 1900-1945.（Ausstellungskatalog）Hrsg. von Walter Kambartel. Bielefeld: Antiquariat Granier 1987, S. 47-52.

Recksiek, Peter: Buchgemeinschaften der Arbeiterbewegung. In: Buchgestaltung in Deutschland 1900-1945.（Ausstellungskatalog）Hrsg. von Walter Kambartel. Bielefeld: Antiquariat Granier 1987, S. 53-58.

Henze, Eberhard: Buchgemeinschaften. In: Lexikon des gesamten Buchwesens. Hrsg. von Severin Corsten, Günther Pflug und Friedrich Adolf Schmidt-Künsemüller. Stuttgart: Anton Hiersemann 1987, Band 1, S. 592-597.

Meinfelder, Peter Rudolf: Die Entwicklung der Arbeiterbuchgemeinschaften in der Weimarer Republik und ihr Beitrag zur Herausbildung der zweiten Kultur, unter Berücksichtigung ihrer verlegerischen und buchgestalterischen Leistung（1924-1933）.（Jena Univ. Diss.）1991.

Wittmann, Reinhard: Geschichte des deutschen Buchhandels. München: C. H. Beck 1991.

Scholl, Bernadette: Buchgemeinschaften in Deutschland 1918-1933. Engelsbach/ Frankfurt am Main / Washington: Hänsel-Hohenhausen 1994.

Kollmannsberger, Michael: Buchgemeinschaften im deutschen Buchmarkt: Funktionen, Leistungen, Wechselwirkungen. Mit einem Geleitwort von Elisabeth Noelle-Neumann. Wiesbaden: Harrassowitz 1995.

Brohm, Berthold: Das Buch in der Krise. Studien zur Buchhandelsgeschichte der Weimarer Republik. In: Archiv für Geschichte des Buchwesens. Band 51. Hrsg. von der Historischen Kommission des Börsenvereins des Deutschen Buchhandels e. V. Frankfurt am Main: Buchhändler-Vereinigung GmbH 1999, S. 189-332.

Melis, Urban van: Buchgemeinschaften in der Weimarer Republik. Stuttgart: Anton Hiersemann 2002.

編『かいろす』第49号、2011年、33～65頁）

Melis, Urban van: Buchgemeinschaften. In: Geschichte des deutschen Buchhandels im 19. und 20. Jahrhundert. Band 2: Die Weimarer Republik 1918-1933. Teil 2. Im Auftrag der Historischen Kommission hrsg. von Ernst Fischer und Stephan Füssel. Berlin/ Boston: Walter de Gruyter 2012, S. 553-588.

„Buchgemeinschaften“ und der traditionelle Buchhandel in Deutschland vor 1945

Ken-ichi TAKEOKA

Diese Abhandlung behandelt die Beziehungen zwischen den Buchgemeinschaften und dem traditionellen Buchhandel in Deutschland vor 1945.

Zuerst werden die Namen und die Gründungsjahre der insgesamt 52 Buchgemeinschaften in Deutschland vor 1945 genannt. Damit wird bestätigt, dass darunter 44 in der Weimarer Republik gegründet wurden, und dass diese Ära die erste Blütezeit der Buchgemeinschaften in Deutschland war. Als Gründe dafür werden die beiden Vorteile der Buchgemeinschaften, die dem damaligen traditionellen Buchhandel fehlten, also die Billigkeit und die Vielfältigkeit der Bücher angegeben. Einerseits konnten die Buchgemeinschaften ihre Bücher billiger als der traditionelle Buchhandel anbieten, weil sie durch die Abnahmeverpflichtung ihrer Mitglieder die Produktionszahl der Bücher genau kalkulieren und damit die Produktionskosten reduzieren konnten. Andererseits deckten die Bücher der Buchgemeinschaften verschiedene politische, kulturelle, religiöse Strömungen, die im traditionellen Buchhandel nicht berücksichtigt wurden. So stellten die Buchgemeinschaften eine wirtschaftliche und inhaltliche Alternative gegenüber dem traditionellen Buchhandel dar. Aber angesichts dieses Gedeihens der Buchgemeinschaften fühlte sich der traditionelle Buchhandel bedroht. Besonders die beiden großen Buchgemeinschaften mit bürgerlichem Publikum, der „Volksverband der Bücherfreunde“ und die „Deutsche Buch-Gemeinschaft“, schienen ihm beträchtlichen Umsatz wegzunehmen. Deshalb ist es kein Wunder, dass der traditionelle Buchhandel die Entwicklung der Buchgemeinschaften zu verhindern versuchte. So wird im Folgenden die Beziehung zwischen den beiden in der Zeit vor und nach 1925, als ihre Konfrontation den Höhepunkt erreichte, ausführlich betrachtet.

Die Gründung der Buchgemeinschaften verursachte beim traditionellen Buchhandel am Anfang keine besondere Reaktion. Diese Gelassenheit war aber zugleich ein Ausdruck von Hochnäsigkeit und Unwissenheit. Das Verhalten änderte sich 1924, als sich die „Deutsche Buch-Gemeinschaft“ rasch entwickelte, und zugleich keinen schlechten Einfluss auf die anderen Buchgemeinschaften ausübte. Angesichts dieser Situation breitete sich im traditionellen Buchhandel endlich ein starkes Krisengefühl aus, und man begann, Gegenmaßnahmen gegen die Buchgemeinschaften zu treffen. Und der erste, wichtigste Anlass dafür war die Werbetätigkeit der „Deutschen Buch-Gemeinschaft“. Durch die Empfehlungen öffentlicher Einrichtungen wie das Reichsministerium verbreitete sie einen ziemlich gemeinnützigen Eindruck. Solche Maßnahmen konnte der traditionelle Buchhandel nicht akzeptieren, weil er an seinem Privileg für den Buchhandel festhielt.

Trotz der allgemeinen Ablehnung entstand aber schon damals die Kooperationsbeziehung zwischen den Buchgemeinschaften und den einzelnen Buchhändlern bzw. den Autoren. Besonders die Lizenzgebühr und die Vorauszahlung des Honorars brachten ihnen große Vorteile. Außerdem überlappten die Leserschichten der Buchgemeinschaften und die des traditionellen Buchhandels fast nicht. Die Buchgemeinschaften konnten dem traditionellen Buchhandel vielmehr viele neue Leser bringen. So war das Krisengefühl des traditionellen Buchhandels nicht immer angemessen. Es gab eine Möglichkeit, dass die beiden konfliktfrei koexistieren. Aber der traditionelle Buchhandel konnte damals diese Umstände nicht erkennen und versuchte, die Buchgemeinschaften, besonders den „Volksverband der Bücherfreunde“ und die „Deutsche Buch-Gemeinschaft“, um jeden Preis zu unterdrücken.

Aber der Kampf mit den Buchgemeinschaften war für den traditionellen Buchhandel nicht einfach, weil sie vollständig autonom arbeiteten. So versuchte der traditionelle Buchhandel zuerst, die Buchgemeinschaften zu verleumden. Er behauptete z. B., dass die Buchgemeinschaften nicht des Buchhandels würdig seien, weil sie die gesunde Lesekultur verletzten, indem sie in großen Mengen Schundliteratur vertreiben. Bei dieser negativen Kampagne unterstützte auch der Börsenverein der Deutschen Buchhändler den traditionellen Buchhandel. Aber dagegen wurde von den Buchgemeinschaften Anklage erhoben. Und der traditionelle Buchhandel konnte die Prozesse nicht gewinnen. So ergriff er als nächstes eine drastische Maßnahme. Er machte die Namen der in den Buchgemeinschaften veröffentlichten Autoren bekannt, damit das Sortiment den Vertrieb ihrer Werke boykottiert. Aber diese „Schwarze Liste“ wurde von den Schriftstellern scharf kritisiert und zurückgezogen.

Nach dem Scheitern dieser Maßnahme wurde dem traditionellen Buchhandel bewusst, dass er die Buchgemeinschaften als gerechte Konkurrenten erkennen musste, und dass er mit den Buchgemeinschaften um die gewerbliche Leistung wetteifern musste. Als eine solche gewerbliche Gegenmaßnahme gründete der traditionelle Buchhandel selbst 1925 eine Buchgemeinschaft, den „Verein Deutsche Buch-Einkaufs-Gemeinschaft“. Aber dieser hatte einen tödlichen Nachteil. Er konnte wenige faszinierende Bücher anbieten, weil der große Teil seines Angebotes nur aus den Lagerbeständen des traditionellen Buchhandels bestand. Außerdem wurde diese Gründung wegen der Zunahme des Kleinkrams vom Sortimentsbuchhandel nicht so gern unterstützt. So wurde der „Verein Deutsche Buch-Einkaufs-Gemeinschaft“ schon 1927 aufgelöst. Er konnte nicht nur keine Schutzmauer gegen die Buchgemeinschaften sein, sondern hob auch vielmehr die Vorteile der Buchgemeinschaften hervor, indem er sie nachahmte. Somit verlor der traditionelle Buchhandel schließlich den Grund, die Buchgemeinschaften zu kritisieren.

So wuchsen die Buchgemeinschaften in der Weimarer Republik trotz der Störungen des traditionellen Buchhandels. Sie waren kein marginales Phänomen des Buchmarktes mehr, sondern nahmen neben dem traditionellen Buchhandel eine wichtige Stelle im Buchhandel ein und wurden ein sicherer Bestandteil der Lesekultur.